

(1)教育漢字の学年配当について

漢字には、文字的な面と単語的な面とがあります。古くは一語一字でしたが、今では一語二字、もしくは三字というものもあります。それでも、英語の「letter」以上の存在で、「prefix」や「suffix」に近い存在です。

「会」という字が単独で、つまり「meeting」とか「society」という意味に用いられる場合は、完全に「word」です。しかし、「会社」「社会」という場合は、「prefix」や「suffix」に近くなっています。「運動会」は三字で一語ですが、運動と会とに分けられて、「会」は英語の「meeting」に当たっているので、「word」と考えてもよいようです。

「会」「運動会」の会は理解しやすい言葉ですが、「会社」「社会」の会はむずかしくなります。しかし、以上の言葉を理解できたからと言って、「会計」や「会心」が理解できるということにはなりません。同じように、「会」と「下」という文字から或る「会下」に至っては、知っている人は少ないと思います。

以上「会」の一例によって示したのに過ぎませんが、漢字の学年配

当ということが、いかに無意味なものであるかがおよそわかっていただけだと思います。

「会」が二年配当だとしても、「運動会」だけが理解できればよいのか、「会社」「社会」まで理解しなければならないのか、「会計」「会心」はどうなのか。それがわからなければ、折角の学年配当も意味をなさなくなるのです。

「会」を用いた語には、むずかしいのもあればやさしいものもある、だから、学年配当するなら、「会」という文字だけでは不十分で、どうしても「語」としてでなければならないのです。

「それはその通りだ。しかし、それは大変な仕事で、五年や六年でできることではない。だから、とりあえず、簡単な文字だけに手をつけたのだ」と言いたいのでしょう。それがいけないのです。漢字の学年配当などということをするから、「漢字は文字として扱えばよいのだ」と考えられてしまうのです。単に文字として読み書きできればそれでよいという考えは、ここから生ずるのです。「いや、そんなつもりで、学年配当を行ったのではない」と言ったって、「漢字学年配当」と銘を打って、指導要領に漢字だけを列举しておいたのでは、そう考えるのがあ

たりまえというものです。それに、審議会が五年、六年の月日をかけてもできないものなら、個人の教師にそれを任せて、一体何かできるというのですか。

どんなに困難だとしても必要なものは作るべきです。「語彙配当表」を作るべきです。今まで、漢字配当表などなくてすませて来たのですから、今更どろなわ式に作ることはなかったのです。

「読」という字は二年に配当されています。その^レ旁の「売」は三年ですし、^レ扁の「言」は四年です。「読」と「売」と「言」と、^レ文字として比較して見る時は、「言」が最も構造が論理的(^口と^辛とより成る)であり、簡単で、「読」は最も複雑です。では、^レ言葉として見る時はどうでしょうか。やはり「言」は「いう」という言葉で、一年生から盛んに用いられる言葉で、最もやさしい言葉といえます。

私は、以上のような見方から、「言」「売」「読」の提出順序が最も良く、「言」「読」「売」がこれにつぎ、文部省の配当表の順序である「読」「売」「言」は最も悪いと思います。事実、私は一年生にこの三字を三字とも学習させて、「言」が最も良く習得されていることを知りましたが、これは常識的に考えても当然のことです。

「海」は二年ですが、「毎」は三年です。「町」も二年ですが、「丁」は四年です。しかも、言葉として見ても、「毎」は「毎日」「毎朝」などと、一年生から使っている言葉で、少なくとも、「海」と同時、もしくはそれ以上に提出すべき漢字だと思います。「丁」も、都会では一年生から生活用語になっています。

「毎」を「海」より一年遅らせて提出している理由、「言」を「読」より二年も遅らせて提出している理由をぜひ聞かせていただきたいと思います。もし、何らかの方法でも、それについての発表がありません時は、勝手ながらこの学年配当案は^レ慎重^レ蜜議したものではないと認めさせていただきます(昭和31年5月、この配当案が文部大臣に答申されましたが、その文面には、「本蜜議会は、教育漢字の学年配当について、^レ慎重^レ蜜議した結果、次の結論に達しましたので、答申します」とあります)。